港北区は資源集団回収実施率 100%!

港北区は市内18区で初めて資源集団回収実施率100%を達成しました。

資源集団回収ってなに?

自治会・町内会、子ども会、PTAなどの団体（登録団体）が、資源回収業者に依頼して、新聞・雑誌・ダンボールなどの紙や布、アルミ缶などの資源物を集める活動のことです。回収量に応じて横浜市から奨励金*が交付されます。

奨励金*…ごみの減量・リサイクルと地域コミュニティの形成を目的として横浜市が交付するもので、回収量に応じて登録団体・資源回収業者それぞれに交付されます。

資源集団回収のメリット

- 奨励金が交付され、地域団体の活動費として利用できる。
- 既存の資源回収業を活用し、地域経済の活性化を図ることができる。
- 横浜市が、回収のための車両・人員を用意する必要がない。
- 行政回収の経費よりも、奨励金の交付額が少なく、財政負担が少ない。

市民・事業者・行政が
それぞれの役割を果たして、
ごみの減量とリサイクルに
取り組む協働事業です。

回収された資源物はどうなるの?

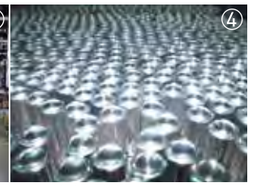
皆さんから集められた資源物は、リサイクルの原料になって新しい製品に生まれ変わったり、リユースされたりしています。

アルミ缶

①
プレスされたアルミ缶のかたまり。

②
溶解炉の中で溶かされます。

③
溶かして型に流されるとこんな形になります。


④
ほとんどが再び新しいアルミ缶になります。

古紙

①
古紙はプレスしてから運ばれます。

②
大きなパルパー（洗濯機のようなもの）で溶かします。

③
溶かされた紙は新しい紙に生まれ変わります。

④
リサイクルして作った紙製品の数々。

古布

①
倉庫に集められた古布の山。

②
用途ごとに選別します。

③
中古衣料として売られるものもあります。

④
海外にも運ばれています。

平成25年度 港北エコアクション

3R夢行動および清潔できれいな街づくり推進功労者（敬称略、順不同）

梅津義雄
杉本宇門
長友美和子
岡本雅夫
梅津正邦
宮崎義昭
針金恵子
多田野右一
安保広美
赤井菊江
大高節子
大戸幸一
宍戸治雄
鈴木昭吉
大曽根親交会
仲手原南自治会

おめでとうございます!

港北エコアクション通信

（こうほく えこあくしょん つうしん）

Lets'enjoy KOHOKU eco life!

発行：港北エコアクション推進本部事務局
港北区区政推進課企画調整係 Tel: 045-540-2229 Fax: 045-540-2209
港北区地域振興課資源化推進担当 Tel: 045-540-2244 Fax: 045-540-2245

ほくほく農業再発見+（ぷらす）

今回は小机周辺でトマトを栽培されている「横浜小机やさい出荷組合」の皆さんを取材しました。

3万本のトマト

――トマトの栽培はどのように育てているのですか。

「横浜小机やさい出荷組合」は小机で野菜を作っている農家が集まったグループで、現在16名中14名が1人平均2千～3千本、全員で3万本を露地（早熟（小トンネル）栽培）でトマトを栽培しています。主に桃太郎という品種を育てています。1年間のスケジュールとしては４月中旬から植えはじめて、5月連休頃まで小トンネルで温度管理を行います。5月下旬から収穫が始まり、6月10日頃から収穫が本格化し、6月20日頃までが最盛期で、7月まで収穫しています。遅い霜の危険もあるし、気温が上がったらトンネルを開けたりと手間がかかります。露地で育てたトマトはハウスと比べて、風味が強く、トマトらしい味がします。市場の人も「形はハウスの方がきれいだけど、味は露地の方がいい」と言っています。

都市農業のメリット・デメリット

――都市で農業をする利点や難しさはありますか。

市場に近いのが利点ですね。地方から出荷されるものは“青もぎ”と呼ばれる状態で出荷されますが、ここでは地方のものより赤く熟したものを出荷できます。トラックで30分もすれば市場に着きますし。青もぎしたものが赤くなったものより、赤くなったものがさらに赤くなったものの方が味がしっかりしています。そういった点をもっと消費者の方々にアピールしていきたいですね。都市で農業をやると問題になるのが農薬です。小机もそうですが、都市の農地は住宅地と隣接しているので、農薬などに対する苦情が来ることがあります。都市で農業をするには色々なことを考えなくてはいけませんが、続けていくためには周りと共存する必要があります。その1つの取組として、神奈川県と「環境保全型農業推進運動協定」を締結し、環境に優しい農業をしていくという決意を示しています。他にもGAP*における点検項目を満たすことを目標に講師を招いての勉強会を行ったりしています。

子どもたちに食べてほしい

――今後はどんなことを目標にしてやっていきますか。

「横浜小机やさい出荷組合」では共通の箱や袋を使っているため、他の人と（品種などを）合わせる必要があります。組合員は昔からこの地で農家をやってきている人たちばかりなので、結びつきが強いですね。小さい頃からずっと一緒なので、みんながやっているから自分も頑張ろうと思います。若い人が多いんですが、GAP*などに対する意欲も高いので、頑張っているなと思います。目標としてはとにかく作物を完璧につくりこなしたいということです。これまでも満足な出来のものがあったかはわかりません。また、自分たちの作ったものを子どもたちに食べてもらえる機会を増やしたいですね。学校から見える畑で取れた野菜を学校給食とかで使ってもらいたいと思っています。

GAP*…Good Agricultual practice、農業生産行程管理

地域コラム「AQUA SOCIAL FES!!（アクアソーシャルフェス）」

～NPO法人鶴見川流域ネットワーキング～

〈めざましい鶴見川の水辺環境回復〉

東横線が鶴見川鉄橋を渡る瞬間、ビルやマンションが続く街並みは、光と緑が織りなすまばゆい自然空間へと入れ替わります。電車を降り、大綱橋のたもとから川に沿って上流に向かえば、支流早淵川との合流点までの河川敷800mは、野鳥が行きかい、チョウやトンボたちの賑わう、緑豊かなフィールドです。休日には、散歩や家族連れが集う憩いの場として、多くの市民にも愛されています。

この地も、2006年頃は、特定外来生物アレチウリと花粉症の元凶となる外来植物が在来の植物オギを壊滅させ、河川敷を覆い尽くす悲惨な状況でした。しかし、鶴見川流域で活動する地元市民団体、鶴見川流域ネットワーキングの地道で継続的な環境回復作業により、現在では目覚ましい再生を成しとげました。特に、2012年から始まったAQUA SOCIAL FES!!（アクアソーシャルフェス）の応援が水辺再生の切り札になりました。

みんなとだからできること

AQUA SOCIAL FES!!は、「次の10年を見据えたコンパクトカー」を目指し開発された、トヨタのハイブリットカー「AQUA」のプロモーションとして、市民団体と連携して全国47都道府県で推進する水に関する環境再生支援プログラムです。初年度の2012年は、全国で131回のイベントが実施され、11,533人の市民が参加。みんなが一緒に汗をかいて、学び楽しみながら、誰もが「いいね！」と言える明日を作ってゆこうとする、企業主導の新たな環境創造の試みです。

鶴見川流域でも「森から街まで。自慢できる鶴見川にしよう。」と、みんなの鶴見川流域再生プロジェクトが始まっているのです。中流域では、港北区綱島の水辺の河川敷のクリーンアップ、早淵川合流地点寄り洲では、日本の原風景の再生にむけ、壊滅した在来植物の復活のためのアレチウリの駆除やオギの移植作業。すでに延べ600人もがこの活動に参加応援してくれました。「地域にこんな課題があるのを知らなかった。」「環境再生活動に参加したくてもどうやっていいかわからなかったが、気軽に参加できて良かった。」「良い汗がかけて、楽しかった。」子どもから大人までこんな声がたくさん寄せられました。オギはみごとに再生し、アシと共存する美しい水辺に生まれ変わりました。繁殖のため日本に飛来し「ギョギョシ」と鳴くオオヨシキリの15年ぶりの再来が成果を語ってくれています。

源流の町田市では、ホタルが自生する保水の森再生事業を通して、生物が多様に暮らす水辺が生まれています。昨年10月末には川の環境再生事業の研修目的で港北区を訪問されたフィリピン共和国イロイロ市の皆様も源流のフェスの活動に参加されました。河口干潟では水辺の生物の生息環境を回復する取り組みも行っています。「AQUA SOCIAL FES!! 2013」をウェブで検索して、ぜひ、環境再生の力となってください。

アクアソーシャルフェス（網島での活動の様子）

アレチウリに覆われたヤナギ（2006年）

アレチウリを退治してよみがえったヤナギ（2012年）

オオヨシキリ

市民、企業、行政の連携が未来をつくる

行政サービスが行き届かない時代、市民は助け合い、地域のコミュニティー環境を支え合ってきましたが、近年、地域の支え合いはすっかり減退し、公は行政に任せきりの時代になってしまいました。しかし、今、私たちは、再び地域の助け合いで公を支えなければならない時代を迎えています。自分たちの暮らす環境は自分たちで支えてゆく。これに企業が参画し、市民、企業、行政が連携して、新しい価値、未来、いいねを、育ててゆく。そんな未来への道を、いま鶴見川の川辺で、AQUA SOCAL FES!!が、開こうとしています。

港北エコパーソン

古田邦夫さん（高田の丘美化活動推進連絡会）

ゴミ de ART

―― 今回、ゴミでアートをやろうとしたきっかけはどういったことだったのでしょうか。

10年前に町内会長となったときにゴミの不法投棄や畑の側溝への土砂の流入が問題となっていて、その解決に取り組み始めました。側溝からかきだして処分した土砂はコンテナ容器1500箱以上にもなりました。また、土砂が流れこまないように農家の方々に土止めの柵を設置するスペースを貸してほしいと一軒一軒頼みこみに行き、そこに花壇を作りました。元々、ナショナルジオグラフィック誌（1983年4月号）の記事でエジプトでゴミを着飾るコンテストというのをやっているのを読んで知っていたのですが、そんなとき、知り合いの金子さんが空き缶やペットボトルを使って風車を作っているのを知り、それを花壇に飾ることを思いついたのがきっかけです。不法投棄に悩まされてきたので、ゴミが嫌いでしかたなかったのですが、「ゴミをからかってやれ」「ゴミも使いようによっては人を笑顔にすることができる」と考え、このアート展をやることにしました。

被災地に笑顔を

―― 今回のアート展で新たな展開が生まれているそうですね。

東日本大震災の原発事故で現在も避難指示区域に指定されている福島県飯舘村に風車と風鈴を贈ることになっています。きっかけは新聞記事で飯舘村の方がボランティアで15年に渡って2000本もの桜を育てているという記事を読んだことでした。私自身10年以上ボランティアを続けてきましたが、これほど長く続けてこられた方がいると知って励みになり、是非この方とお会いしてみたいと思うようになりました。

そんな中、偶然にも近所に住んでいる蛯沢さんという飯舘村出身の方と知り合いだったことから話が進んでいきました。風車と風鈴はこどもたちにメッセージを書いてもらった短冊とともに手渡しする予定です。

高田の良さを生かす

―― 今後の目標を教えてください。

現在、高田の丘には6箇所も手づくりの花壇があります。これほど多くの花壇が出来たのは農家の方々が私の提案を受け入れ、積極的に土地を使わせてくださったことと、子どもたちの協力があったからです。現在はもう一つ花壇を造成する予定です。農家の方々も「周りが綺麗になってきて、自分の畑もきれいにしたい」という思いを持ってくれているようです。アート展も続けていきたいと思います。

来年はパソコンのデスクトップのディスプレーを使ってモンスターを作る予定です。高田の良さを生かした企画ができたらと思っています。

左から蛯沢さん、金子さん、古田さん

ゴミ de ART展の様子

風車

TOPICS: 第1回港北オープンガーデンを実施しました!

左列：パンフレット、中列上段：なかてはらお花畑、中列下段：市川さんのお庭
右列上段：当日の様子、右列下段：当日の様子

港北区役所では、5月18日～26日の9日間、よこはま緑の推進団体港北区連絡会の協力をいただき、「第1回港北オープンガーデン」を開催しました。緑が多く、四季折々の花々が楽しめる港北区の魅力を、区内のお庭や花壇を巡る中で感じていただきたい。花と緑をきっかけに、地域や人々の間に交流の輪が生まれてほしいとの思いから開催されたオープンガーデンは、期間中、市内外から約500人ものご参加をいただき大盛況の中で第1回が終了しました。

今回の対象は、22か所のお庭や花壇で（個人のお庭8箇所、よこはま緑の推進団体花壇14箇所）、見学者の方々、お庭を公開した参加者の方々それぞれから、「オープンガーデンを通じてお花談義に花を咲かすことができ、とても楽しかった。」などのご感想を多数いただくことができ、とても有意義なイベントとなりました。